

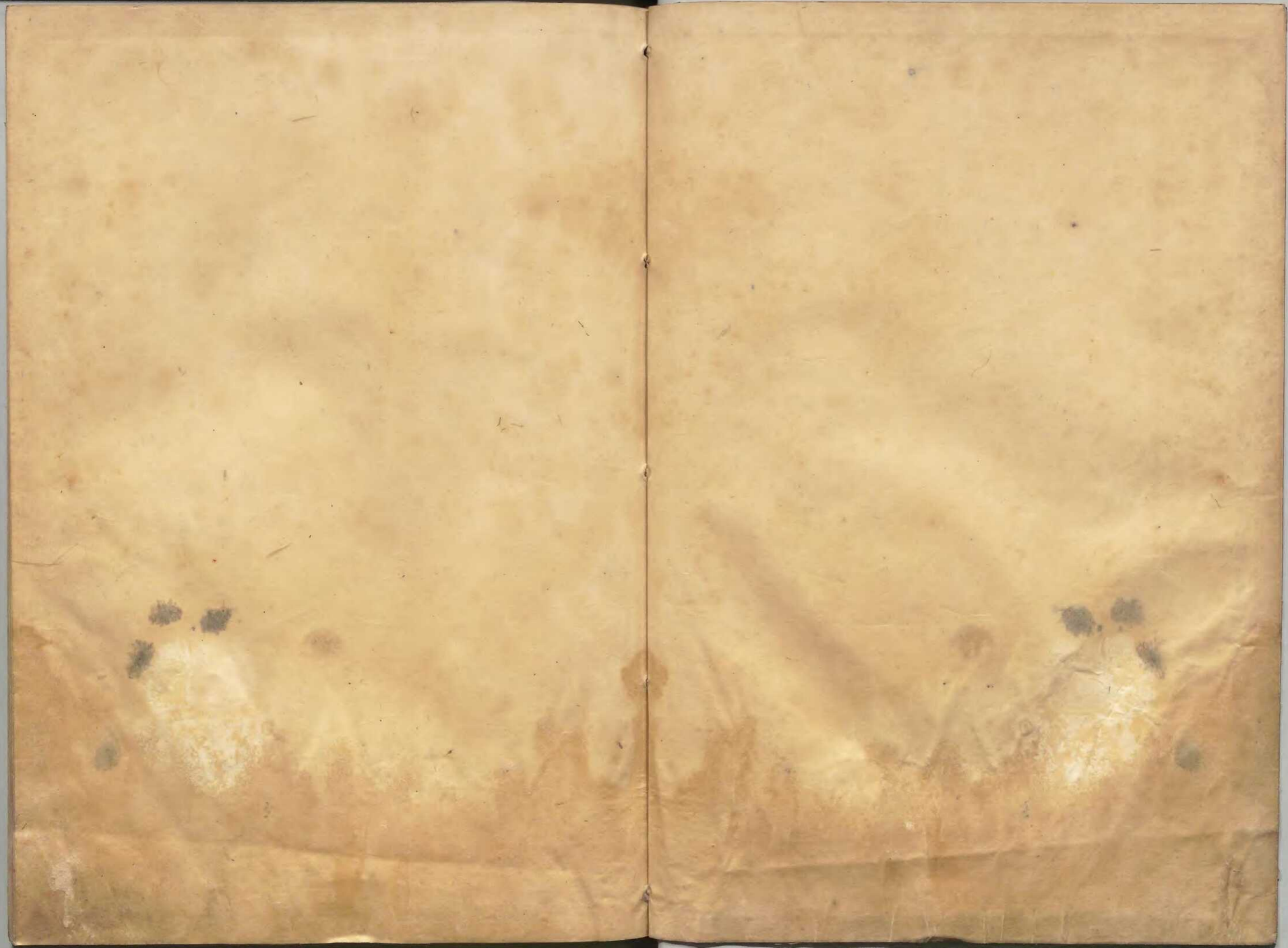
寛永諸家譜

醫者
八卷之内

180

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186	(178)	
函號	特	76	1





施藥院

香余院

安栖

与安

久志本

徹跡

寛永諸家系圖傳

丹波姓

施藥院

後漢靈帝

延王

石秋王

阿智王

高貴王

淺草文庫

そどめく本朝東宮と成り當嗣
阿多信一領主と成り郡賀使と
号す

志保直

本朝小宮ひく公生一丹波必小
領主坂上乃姓を考す

駒子

弓束

首名

孝子

大國

康頼

醫博士

丹波矢田郡の人なり醫術神靈小
通一農具天下りきこゆ

永観二年了 醫心方三十卷を撰
て公家小進賢も 一めく丹波
宿祢をこま

重明 エハシ

典薬頭 エハシ

忠明 チウメイ

侍醫 トカ

丹波女 タニハメ

典薬頭 エハシ

従四位下 ヨウイ

雅忠 ヤチウ

典薬頭 エハシ

施茶院使 セチヤ

累殿 ツラシ

二位 ニイ

禁色雜袍をゆりさ

重康 エハシ

侍醫 トカ

出書頭 デシヨ

施茶院使 セチヤ

従四位下 ヨウイ

重頼 しげより

自水みづ

典薬頭てんやくづ

醫博士いしやくし

從五位下じゆいごげ

甲世かよ

基康 もとやす

自水みづ

典薬頭てんやくづ

從五位下じゆいごげ

頼基 よりもと

典薬頭てんやくづ

院いん 院いん 院いん

侍從しやくじゆ

二位に

長基 ながもと

典薬頭てんやくづ

院いん 院いん 院いん

内近頭うちぢやくづ

右兵衛尉うでべゑり

正四位下せいぎゐげ

季康 きやす

雅楽頭みやがづ

典薬頭てんやくづ

正四位下せいぎゐげ

忠頼 ちゆより

典薬てんやく 権助ごんすけ

正五位下せいぎごげ

忠景 なむけ

百計頭 ひゃくけいづゑ

典茶頭 てんぢあづゑ

正四位下 せいゐのげ

忠行 なむけ

兵庫頭 ひんごづゑ

大膳大史 たいぜんのだいし

正四位下

頼景 よりかげ

大京権大史 たいきんぐんのだいし

典藥頭 てんやうづゑ

季景 あきかげ

總取次 そうしゆじ

典茶次 てんぢあじ

從四位上 じゆゐのあがひ

季賢 あきけん

季益 あきえき

季重 あきしげ

季益が赤子なり あきえきがあかこなり

内綴り一りてに別よ領也 うちづゑりいちりてにわかよりょうなり

宗清 しゆきよ

牛國 うくに

宗忠 しゆちゆう

牛國 うくに

全宗 ぜんしゆう

施茶院 せぢあゐん

牛國 うくに

昇殿 しやうでん

一斗めを山門の僧なり醫となりぬら
 還俗去く難知吾院道三より去りぬ
 醫術を学まなぶ
 秀者一統のとき全宗法祿よりやうしゆう
 一侍去り因過地より異なりい
 たりありありを聴きぬきのぞむふありあり
 連つら

天正年中秀者物より朝小達去り
 施茶院使小使せぢあゐんの時小門戸せぢあゐんとしき

秀隆ひでたけ

天下疾痛乃者あまのをまひひき集あめ茶餅ぢやびやう
をほごほごこを事こと一百日ひゃくにちのて施茶院せぢやえんの
実まことをまままそのそのおおちちをを又またはは本ほんととるとも
とと一日いちにち全ぜん家けなりと丹波氏たんぱしなりなり醫い
術じゆつ小こととひひてて其その傳でんあり子孫しそん施茶院せぢやえん
ととりてて祿号りくごうここももああれれ害がいととりて
氏しここもも例れいり

宗伯そうはく

施茶院使せぢやえんし 生國山城なまくにやまじやう 累かさね殿どの
秀吉ひでよし諱なづなのの字なををたまたまりり從よ五位ごゐ下げ小
叙せうじゆ侍しやうじ從じゆりり但た原はらのの姓しやうととなり
聚樂くわくらくりり行幸ぎやうきやうのの少せう親しん騎馬きばととてて供奉くわうほう
とと又また和哥わがのの席せき小列せうれつとと後のち從じゆ五位ごゐ下げ
小叙せうじゆ少將せうしやう小但せうた也なり

施茶院法せぢやえんぽう也なり

生島近江なましまおんが

累かさね殿どの

實を江列之雲之部なる資隆が子あり
い少けなりて父よりこれ一鶴宗虎
が養子となりて醫業を受宗虎
叔父宗鑑を伯列南條の族なり世
年州て洛陽より法りあましく
諸醫の門に入りあましくその術を
きこむ又丹陽小ゆき如意庵を師
とて書を讀事数年業を遊て
洛陽より法り月毎常菴亦の法者と

曰くその奥義を法也
永正年中醫一栢園東より京小入て
儒書を法り醫經を法り宗鑑ゆき
てこまを師とて醫方を習ひ易經
小通も一栢その法とあし海本を感
羨す今より醫經を法りて
いりこまより日本とこたし法經
の冠義を法りて撮要集數考定
を述化し家傳の書よりて始宗虎を

宗子少一進賢方を傳し秀吉に
てめ番の醫師として法眼小叙し
領地をさしむ

東照大権現そのより所を信したまひ屬
卿茶を調進し又江別小をひく更
宗地を拜領し宗虎子なり婚合れ
りしと小なりし宗伯をゆりて地を
法づめ茶方を法しより後秀隆卒
て嗣子なり全宗にまじりて

才宗伯をまじり家業を継し
慶長四年勅許をわたり妙施茶院
の家督を法ぎ

大権現より所よりそより法録し
右小侍をく恩遇をさし厚し
御子善君疱瘡をうまひしより
茶を進献ししところあり

日五年同ヶ宗卿陣小供奉九月廿
大権現卿不例の少き茶を献して

馬かりり沖平渡あり十三日波阜小
いひいあまきり軍中少侍より
のり忠告され室家の痲疾を療むる
あり義直弼頼房等の病痲あり小を
まゝするを得むといふ事な

大坂陣のとき

白徳院殿へ供奉

大権現

白徳院殿より

將軍家所入海系心のとき各皆例

を遊宗伯が宅へ一候御ありて御
装束をおくさめら敷く時
を恩賜あり

宗雅

法眼 法尔 昇殿

京都小をいへまゝく病人を

宗屋

ま福を茶をほくふも事あ度各一

百日女之れ宮病悩のとき茶を献

志く冲平渡あり

寛永十六年法平小叙也

法眼 界殿

一鴉の家とほぐ

秦

家傳ていでん一姓しやうを大おほ江え氏し秦しんなりと云いふ
後のちありあつてあつて田た中ちゆうと稱なづへり又また
内うち宿しゆくと稱なづへり

今いま梅うめをいふ一ひと右みぎ譜ふ一ひと波なみ多おほ時とき成なりの
秦しん野のの家いへを因より藤ふじ系けいの流ながなり
大おほ江え姓しやうの内うちいふと云いふ秦しんの稱なづを
えむと云いふと云いふ家か説せつをいふ

うり志づく家一 志海一て
後勅小そかな

善秀

筑後守 母ハ松永氏が女
丹波大守内宿氏が家長となり武功
あねよりうりく内宿の称号をうけ
且と妹をめしうり三右衛門の比を
内宿氏子孫絶たり故より母と度

仕度せむして海西咳一 居一
利發去々竹雲と号す
安永十四年十二月朔日小孫を歳八
十九

宗巴

字々徳岩 又立安と号す
天文十九年二月十五日丹波小矢木の
城一 居一

幼少より瑯里の老師に就て書と談
字を學ぶ人ふその敏悟なる哉稱
八歳にして連哥の席小のそして執
筆也

天正三年歳二十六にして
醫一ありあつて意庵宗桂が門小
あそび理を宛事を詳し一致
少して倦本なり一日宗桂がりて
いそむ能りいと木の我才子の

列小の角も家小のひく一語道三
と師して深く素同程に奥義を
探り精しく治療の要と同一法
の本革張劉李朱等の書略を大抵小
通し一日が賀れ大守頭西太一腫り
法醫の疾腫かりしを時一宗也と
そく診察せし宗也がそく疾腫
小いあつて是時毎雨そく傷を小
心そくものなり家小のそく業則と

かどい三日ありて平金もまゝ一士
ありきと宗巴が醫術小くりきと
守て病なりとて清く跡を診せ
む宗巴診察してよく油耳を治
すべしと云ふも技士あてはせ
明年は林果して死せり人々か
ゆを感じ
同十八年豊長秀次宗巴が醫術小
くりきと云てりかきれ七石

乃此を考ふ

同十九年三百石の地をくま人をぬり
てて石の地を領せし家に列名
村ありとのこなきと云て法
宗小叙一并り奉命院の称号を
給り恩直の原事とのと
慶長五年

大権現宗巴が書居をばりて同考ふ
時一幕下りて
台紙

孝子 孝行 記

曰六年城列 市色村横 大詔村

とひく 五百石の比と

曰七年に 小詔

大権現

白河院殿

曰十年洛陽正親町

とたまふ

一日幕下小詔

見下

本朝古来高船の便

と賞を 其儲好悪

と病と 瘵を

と海と や 醫を

茶から 伏して

書を 給り 大明

家 寓居

貴魚 會歎

んや 素粧

醫家乃其まじりかよきむき可也
もくく明白めてあれを善也
はるる醫門の事何事これ小海さ
難んやこいよ志らわとじやの

大権現山ありて果一を海らむ多事
南極乃あらるごと切ならとてあし
命いしとと一かひきあふやあ
南都東大もれ蘭者治ときしじり
もき醫家乃業よあ〜とて

宗巴が事一堪ふはとりて
命ありて 勅使友使小志い〜び
ゆ

同十二年十二月十日小率も少
又十八西山麻王院よ花并
家苑の玉海網目たれ〜本朝一都此
書〜ゆふらわて

大権現一秋を
宗巴在世れ申如く書〜ゆ〜儒術

とてこれに「菴書子集」婦人女子
此記は向山よりして菴書子集とてこれに
をくらし

日十二年此馬氏が語を記す此書
同記を漢にこれらに菴書子集
以書を漢に人あり又書して
陪に菴書子集百人あり又書して
病小外その語を菴書子集に
此書素同記抄十卷醫學的の書

十五卷鍼灸參伍的方一卷炮灸詳鑑
一卷本草序例抄八卷あり且儒醫
仙佛諸子百家和漢の書あり又
き本をありめく門を立部を介て
五十五卷となせり本草一といふ
石を題せども菴書子集又一巻外
求り意下てありしにこれ流傳
乃抄二卷あり
後陽成天皇此勅同を記す本朝

小舟のあぢぶ所の洗水香の好悪古
今の人のみぢくふ所のあぢ小冊
書一頻煙と名ぢき
小うなふ醫を同門小あぢぶもの言
他人あり

酒隣

字有室 法眼 海陽一
實を感方院淨孝が子なり宗包頼て

子少一女をありてこま一妻あは
まゝ家業を継一む
慶長十四年けりめく後府并一
江戸小館まゝ

大権現をよび
台徳院殿一喝一そま川内領地

元和元年の夏大坂陣小
台徳院殿一まゝかひたて

寛永二年

將軍家人參數行をたまふ

曰三年

將軍家御上御乃と記云鑑をうび

徳隣をうて諸醫の首たうしむ

あり道中の号令は二人より全

人耳りて薬を求むる貴賤をさ

りて貪富をえらまむ唯人をまふ

をうりてさ乃まが徳とむ

五株丹波守傷をうりまふ一醫ハ陽

症少なりてこまを療むその屋まひ

まをくこふらぶ一醫を陰症也や

参議諦あてて決断む諸醫らふ

を未如時一徳隣診索して

いここま陰陽を小不足乃症

なり候と薬敷貼を阿るて平漢

かのごとき乃類あがてかまふ

ど平生もらゆとこら乃醫薬病

端八卷有り善從集少名はく
又古今和漢詩賦文章なび小
づらゆ述はゆとこゝの雜記
名はきて老誕年少ふ
寛永八年五月九日江戸よみて
年少ゆ一四十一
徳隣在世乃中洛陽より武江小
徳取より年をうそ二十度門外
子數十人有り

宗徳

母名角倉氏こののうらぐらじの女

寛永九年この一死し年ねん五十一

昌渭

字名文泉ぶんせん 天龍寺麻王院てんりゅうじあさきいんの僧

母上小田おた

元和六年げんわ小死こし年ねん二十九

女子

母上おと一四

女子

母と一印

女子

母と小山氏とやまのうぢの女むすめ

徳隣とくりんの妻めかけ

某なにか

母と小印こいんと早世はやせい

女子

母と小印こいんと早世はやせい

某

某

母と小印こいんと早世はやせい

昌倫しやうりん

母と小印こいんと早世はやせい

字ハ賢溪あきみ

天龍寺てんりゆうじ康王院かうおういん住僧ぢゆうそう

母と小印こいん

某

母と小印こいんと早世はやせいと一印いちいん

後村氏一姫

秦石

字ハ惊渭 海陽一

幼少より西山小笠原の書を讀

寛永八年父德隣が病小を治す

下江戸小越村一相列馬乳小

訃告を聞

同十年八月

將軍家小越一

同十一年

將軍家御上御此も幸二条乃城

一ひくね一

一ひくね一

父此時の

同十二年江戸小

將軍家一

同年六月十日

同十四年

將軍家沖不例乃時江戸小指也

曰十五年九月七日江戸小指

曰十八年九月江戸小指一

竹系君此沖彼生と賀一と云

將軍家小指也

曰十九年江戸

孝

早世

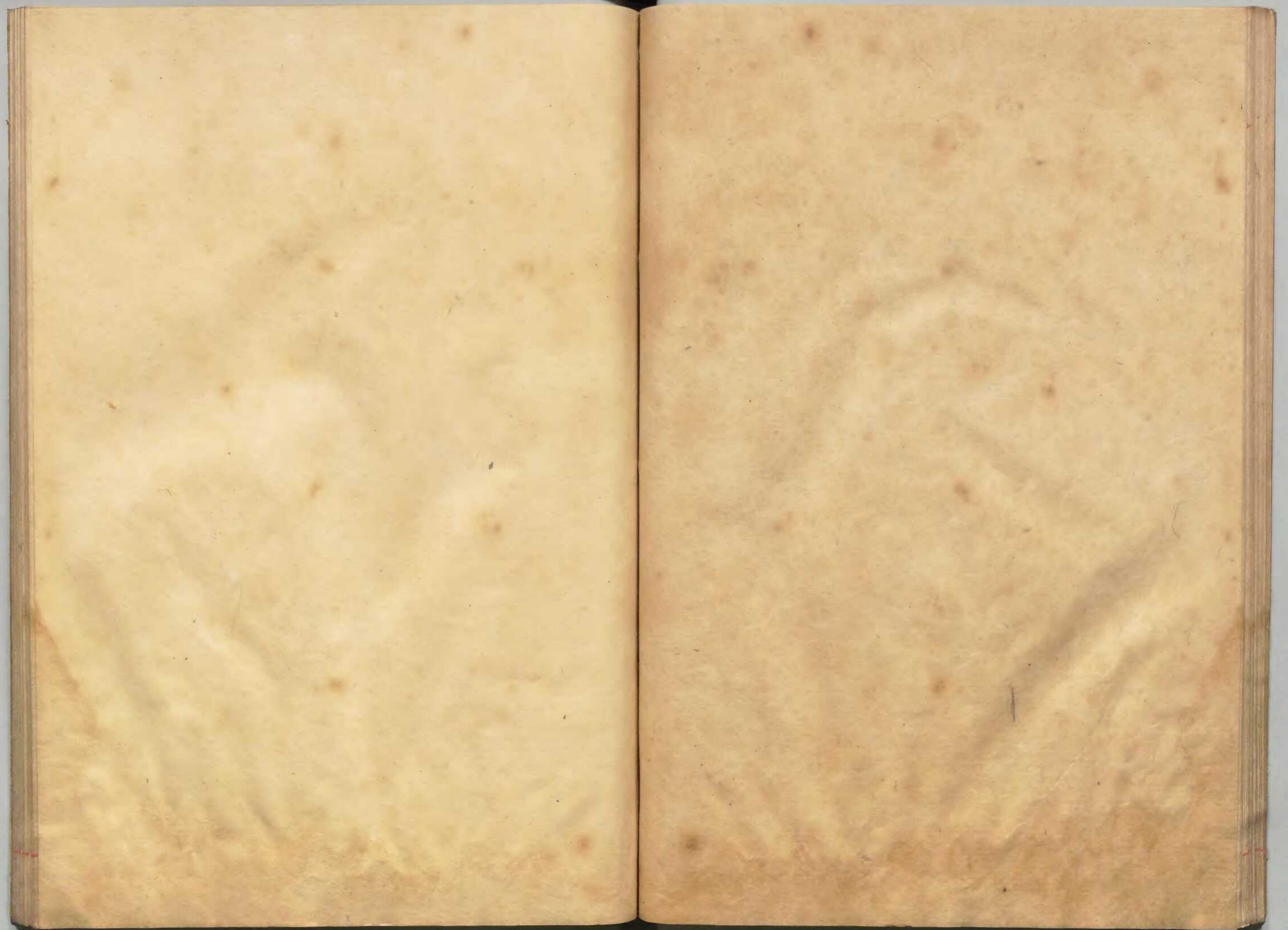
孝

早世

孝

某

早世



中絶の例系図

丹波姓

後漢靈帝六代

志摩直

日ナリケル

坂上姓成たす
新田丸田村丸元祀

康頼

ヤモリ

志摩直又代乃孫
乃姓をす丹波醫道元祀

長昌 ちやう

上 のり 曰 い

宗仙 そう

小糸早雲 こいと 其 その 始 はじめ 々 々 用 もち 東 あづ 下 した 向 むか

長栄 ちやう

長傳 ちやう

大権現 おほ 用 もち 東 あづ 所 ところ 入 いれ 必 かならず 此 こゝ 少 すく 々 々 由 よし 杖 つゑ 助 すけ 小 こ 形 かたち

長願 ちやう

系 けい 古 こ 危 い 陣 ぢん の の 少 すく 々 々

大権現 おほ 一 ひと 信 しん 之 の 身 み

用 もち 于 を 原 はら 所 ところ 陣 ぢん の の 時 とき

白 しろ 蓮 れん 院 いん 殿 でん 一 ひと 信 しん 之 の 身 み 宗 そう 部 ぶ 一 ひと 々 々

法承小叙リツシウ一綸旨リを以載リ也ト 昇殿ノボリ

長者チヤウシヤ

字栖ジシ

安長十八年ヤシキヤウ

大権現オホケンゲン江戶エド

ゆきとされし法承小叙一綸旨リツシウを

頂祿チヤウリク也

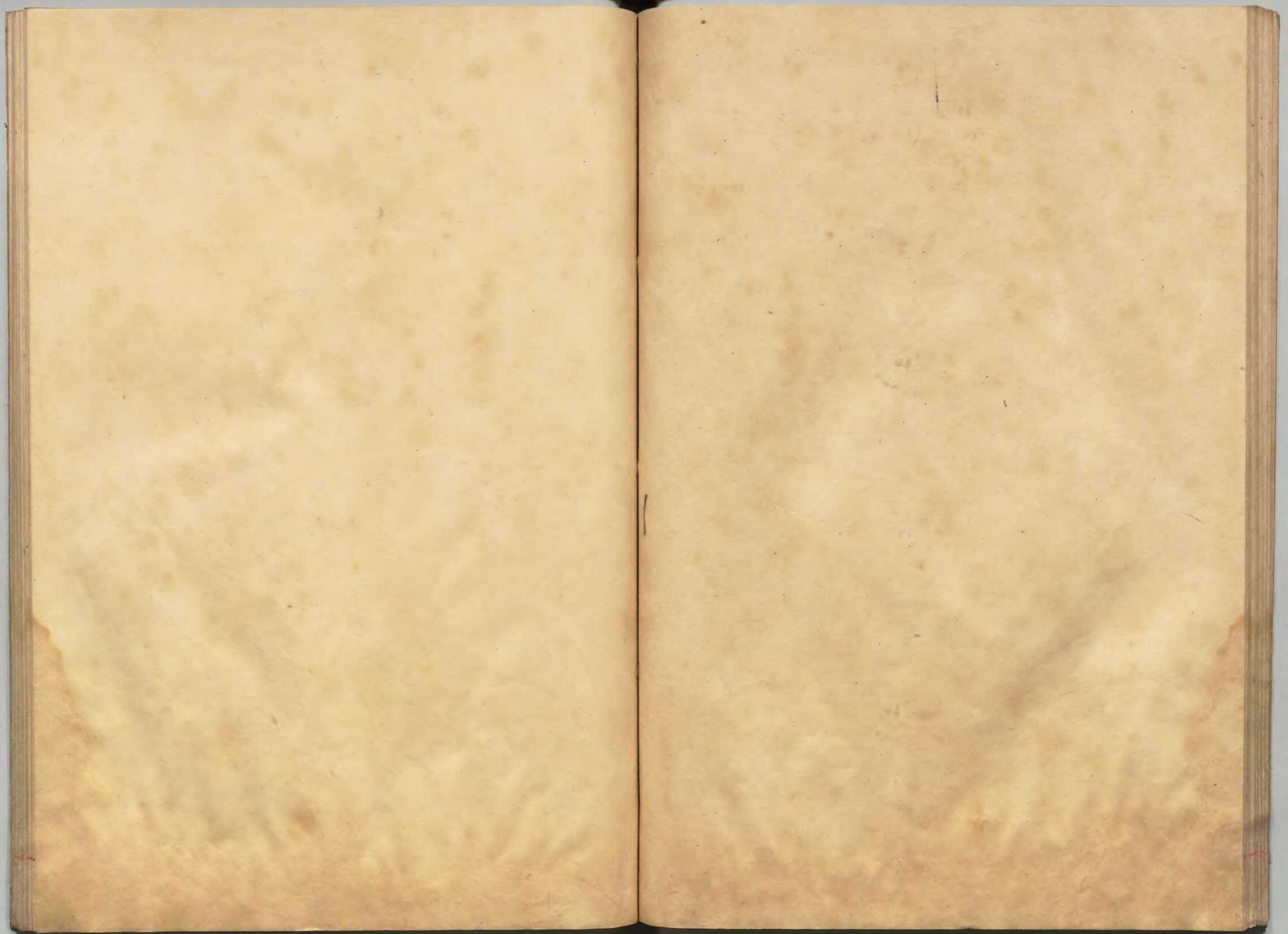
元和九年ゲンワ

右徳院殿ウチノトクイン御上ミカド御此ミコ少シウき三糸乃内府ミヤノウチノ

勅渡寺チツワタテ大納言オホノリノコト之ノ執奏シツソウ也ト 昇殿ノボリ

其乃ミコノ

將軍家シヤウジュンより法承一人リツシウを奉り給



頼房よりむら

肥前守いぜんのかみ

頼俊よりとし

陸奥守むつのかみ

頼親よりちか

大和守やまとのかみ

後四位上ごよゐのかみ

清和天皇せいわてんかう即位きせき乃なり後ご胤いん多た田た満まん仲ちゆう共き二に男おとこ

清和源氏せいわけんげん

河山かみやま

頼治よりとも

中務少輔なかつぶらのせり

親弘ちかひろ

下野守しもとのまもり

親治ちかとも

中野七郎なかのしちろう

有治ありとも

太郎たろう

頼仲よりなかつ

白岩宮亮しらいわのみやのりやう

頼次よりつぎ

三郎さんろう

頼仲三男よりなかつのさんご

比叡院中納言ひえいゐんちゆうなごん

實總まこと

小倉之河守こぐらにのまもり

源兵衛尉げんべいゑい

牛園うしづの

日必依倉ひつよくら

仁列にりつありて五子貫比ごしけんひ

頃も實總まごよりまごりてまごりてまごりて
依より木き兼か禰ね子こ屬ぞくも傳たづね問もん實總まご同どう必かならず
天神宮あまのつみよりまごりてまごりてまごりて
其その心こころもまごりてまごりてまごりて
實總まごがまごりてまごりてまごりて
ははい海うみ梅うめ花はなの用もち心こころもまごりてまごりて
是これ禰ねの我われよりまごりてまごりてまごりて
二ふた柏かしわ葉はふと改あらため梅うめ掃はき肉にくをもまごりてまごりて
致いたすまごりてまごりてまごりて

實時まごとき

た道みち

生國なまくに同どう前まへ

行總ゆきつと

豊前守ぶんぜんのかみ

生國なまくに同どう前まへ

後實ごまご

行山ゆきやま右みぎ邊へ門かど

生國なまくに伊い豫よ集じふ

浪人なみのりとなりて城しろ列りゆう小せう遷せん里り領りやう也なり

こ乃史より小倉を改めて行山と号す
剃髪して宗依と称す

天正十二年十二月廿八日死す

宗僊

童名市三郎 生母同前

少年乃以後實より志すいひ城列

り専り学を好侍歴史小通達

をいとも醫藥を樂しんり一鷹

宗虎醫をいひて京師よりあり

六のゆい小宗仙是より志すいひ

学教年なりしを志す醫術とあり

世より名を傳へり

天正十一年よりいひて長考志に

謂見を後隠居と志を教あり

同十五年十月十日二十八歳死す

死す

宗哲

与安 生國山城

實ハ後アツグ子ナリ宗仙姪トシテ
督少一蒙督ヲ継一ハ宗哲十歳
ノとき宗仙死シ有リ一モ一瑞小
去ルグハ蒙督ヲモリハ力ヲ使クモ
ト少一ハ長ナク及テおとく
その術ヲ均蒙督ヨリ方一モ一

慶長二年一瑞乃養者をとりて

とどめく

大権現一神調一

同五年

大権現上秋景勝を征伐志ナク

野別小山一ハ兵を少キメ留置

少楠之成に別依和山一ハ

及逆成企西賊乃黨少相議甲兵

起を緯もて一ハ露歌せり

急いそりまるる 如た旂いを濃せ列き開りヶ原ら
一ひ抄しさまままゞり尾び列り清き洲よ小ち恙ち
御み之の海うふこの日幕か下り柳や風ま疾る
つらりりを海ふ處從せの士率ら卷まふ
みらて休天ともこのとき宗哲ら御み茶ち
を献一い合あ本ほん大だい一い御み快かい氣きありて
翌あ日ふ速すみ一い御み本ほん渡わた志しの海
曰い七しち年ねん三さん月げつ十じゅう五ご日にち山やま城しろ圖ず紀き伊い那な
横よこ大だい海かい上じやう奈な良らあ所乃の内うち冬ふゆ百ひゃく石しやく

幕まくら府ふ一いとひく二百ひゃく石しやく都とて五百ひゃく石しやくの比
をを命めいふ御朱しゆ平へいこま進しん一い
曰い辛しん海かい陽やう一いとひく小野の本ほん繼けい后ご助すけが
舊きう録ろくを洋領りやうとも
曰い八はち年ねん四し月げつ二に日にち法はふ眼げん一い叙ぎよとも
曰い十じゅう一いち年ねん五ご月げつ十じゅう五ご日にち法はふ平へい一い叙ぎよとも宣せんこ
進しん一い時とき一い階かい下げ荒あ人にん頭かぶた中辨べん
寂じやく原げん總そう光くわうを主以もて僧都と一い叙ぎよともら
一い寺ていの勅宣せんを象象さうとい下げとも不ふ肖せうともかり

み回辞こ——こきくまわ

日十三年こ後府城こ亦曲輪こ——こきく

宅地こをきく

將軍家こ之氣この所こ少こ兒こ聊こ所こ不こ例こ可こ

殺こ醫こ乃こ術こ盡こここきり

大權現こ武列こ江戸こ——こ渡こ所こ可こりて大

驚こを多こひみじこかこ紫こ雪こと興こて

減こ氣こを得こを多こふこそのらこ散こ命こと

ゆり宗哲こ所こ藥こを飲こむこ一こ眼こ可こりて

所こ口こ渴こ少こ減こ——こ每こ眼こ可こりて熱こ退こと全こ

所こ平こ渡こ可こり

名こ漣こ院こ殿こ所こ感こ此こ可こり金こ浪こ所こ眼こ等こ

をきく

大權現こ孫こ秘こ此こ藥こ方こ所こ傳こ授こ且こ所こ致こ可こ

所こ藥こ是こ數こ多こ洋こ頭こもこ所こ藥こ方こ所こ藥こ

忌こ等こ今こ——こをきく可こり

大權現こをこうこびこ尾こ列こ大こ納こ言こ義こ也こ御こ地こ列こ

大こ納こ之こ頼こ宣こ御こ水こ戸こ中こ納こ之こ頼こ房こ御こ

河邊例河内少民を以て宗哲河
藥を献と云ふ乃そなりと宗哲
命を蒙り八之字并一萬病圓
策雪銀液丹牛黃清心圓烏犀丸
等乃河茶を製と別諸大名小
領有ふ

同十七年

白徳院殿より定家此公儀を有ふ
同十九年同二十年大坂あ度此河

陣一供有

大指現一進侍一有とあり

元和二年

大指現該府より河警持とて曰國
田中少出河河是今夜此所小
宿一有ふと夜中一有とあり

大指現河河胸一壅滞と云ふ甚危
急なり爰一有と云ふ宗哲河藥を
献と河減氣有と河還此時

警將を 台賢志を多小部入真

河府より河還向ののり河腹中

塊河りて時痛たまふ

大権現みびか寸白乃虫となして

萬病圓を服さすも仍宗哲誅を

ていへて従り大毒乃科をりて是

をせ免を積を除と河りて下りて

正氣をふれりたまふに護り難か

とよ也やい下り河許容なき

小ら日を送り河難痺あり時小

台徳院殿にり歎息をさす

大権現眠をの土等とめ 治小

大権現万病をを用いしや下り病

河曾抄の疾なり油等波茶を止

牙向べきの旨速りてさす

さなり眠近れ士等御指縁をの

りて宗哲をり上件に

くゆり宗哲止事とえりて

大権現乃上（大権現）同小達（小達）是甚賢通小

叶（た）也勿（な）當（ら）瘡（な）の沖（き）氣（ま）又（ま）を家（か）位（い）列（れ）

言（た）語（り）那（な）小配（せ）誼（ぎ）せらふ去れど家（か）比（ひ）

と飲（の）る（と）と舊（こ）時（じ）乃（の）ども一（い）花（は）の（ら）

數日（すうじつ）な（ら）ど（も）去（り）くは并（な）小

大権現（大権現）費（ひ）津（つ）志（し）

同（と）曰（い）年（ねん）曰（い）月（げつ）津（つ）教（きょう）使（し）を（さ）敷（し）り（に）戸（こ）

小（こ）弟（てい）系（けい）

右（みぎ）德（とく）院（いん）殿（でん）下（げ）謂（い）く（そ）も（の）川（が）の（と）時（じ）下（げ）

侍（さむらい）下（げ）は（は）是（こ）先（ま）君（きみ）此（こ）密（ひそ）殆（た）傍（た）人（ひと）

小（こ）越（こ）ら（り）三（さん）の（み）み（や）ど（も）業（わざ）を（し）戒（い）付（け）

事（こと）又（また）是（こ）忠（ちゆう）なり仍（い）津（つ）賜（たま）日（ひ）光（ひかり）山（やま）小

詣（ま）敬（うや）で（は）御（ご）靈（たま）廟（ぼ）を（た）拜（たま）へ（り）そ（も）ま（り）

侍（さむらい）

右（みぎ）德（とく）院（いん）殿（でん）下（げ）は（は）是（こ）先（ま）君（きみ）此（こ）密（ひそ）殆（た）傍（た）人（ひと）

同（と）年（ねん）嚴（げん）命（めい）下（げ）り（し）御（ご）城（じやう）下（げ）

一（い）と（し）相（あ）飲（い）む

一（い）と（し）相（あ）飲（い）む

孝

日六年、賴房卿常列水戸城、
病疾を患へ、
命を蒙り、
秋、平金志、
日八年十一月十八日、
卒、年五十、
法名曰治院号香源

圓兵部大輔が妻

孝

松倉長門守が妻

宗塚

与安 生島後河

元和九年二月廿六日、
先容を以て

徳院殿

將軍家より、
禱

父宗哲舊領を承継す

寛永十一年三月十一日

宅地を祿領す

宗實

雲林

生息回奉

利實

二郎兵衛 生息回奉

家の紋梅端内

度會姓

久志本

天御仲自名

天八下名

天二下名

天合名

天八百日名

天八十萬魂名

神戶産灵号

櫛太乳鬼命

天曾己多智命

天嗣挥命

天珍挥命

天泚雲命

天牟羅雲命

又天二上命とみはく 後小櫛命

曾孫天降たも時供奉

天改与命

天日别命

美國見賀改建与来命

國見社是なり

美田都久祢命

美指津命

し若子命 わかこの

二男 ト 景行成務仲 けいけいなるせむし 良二代乃 よしの あひら
此大祓也 このおほしはらひなり

命依布命 にまの

一男 ヒ 祓功應祓二代此 はらひこうおほしはらひ 回乃大祓主 まわりのおほしはらひぬし

美和志理命 みわしりの

一男 ヒ 履中此 はきかた 御宇 みま の大祓也 のおほしはらひなり

阿波良波命 あはらの

一男 ヒ 安康此 やすかみ 御宇 みま の大祓也 のおほしはらひなり

乙乃子命 おのこの

武烈此 ぶりよく 御宇 みま 示大祓 しのおほしはらひ 宮此 みやこの 大祓也 のおほしはらひなり

飛鳥

ろくめく石部姫と大海より行は元祖

継體は御宇に示す御宮は太神宮
宮造氏神造氏

少彦

用明崇峻二代は同示す御宮は太神宮

嗣

舒明は御宇に示す御宮は太神宮

高

孝徳は御宇に示す御宮は太神宮

志古史

天武元年に示す御宮は太神宮

御氣

ちどめ^祿の^ぎ祿^ぎ宣^き祿^き補^ふせら^る兄^え忠^{ちゆう}ハ
外^げ主^{しゆ}小^{せう}補^ふせら^る志^し右^ぎ主^{しゆ}ハ内^{ない}宮^{きゆう}ノ
補^ふせら^る於^お志^し右^ぎ主^{しゆ}嗣^し子^こな^らし^て
荒^あ木^き田^た氏^し祿^き宣^き祿^きと^なり

天^{てん}智^ち三^{さん}武^ぶ比^ひ伊^い守^{しゆ}二^に亦^{また}大^{だい}祿^き主^{しゆ}比^ひ祿^き

兄忠

外^げ宮^{きゆう}祿^き宣^き祿^き比^ひちどめ^{ちどめ}なり

天^{てん}武^ぶ元^{げん}年^{ねん}兄^え忠^{ちゆう}と^りて^て豊^{ひよ}受^け會^{かい}
大^{だい}祿^き宮^{きゆう}ノ^祿宣^き祿^き補^ふせ^らる^御氣^き年^{ねん}
考^{かう}大^{だい}祿^きゆ^へ一^{いつ}辭^じ讓^{じやう}也^{なり}

忠知

人^{ひと}今^{いま}人^{ひと}外^げ少^{せう}初^{しよ}位^いと

清足

人^{ひと}内^{ない}人^{ひと}外^げ正^{せい}六^{りく}位^いと

河原

百人

正六位上

勝辨

百人

初位下

言百

百人

正六位上

春彦

六男

兄冬雅が

嫡子一乃

祿直白太史

明祿

おまかなわ

禮並

檜祿直小掾

百人

六位

河相

伊依奈波宮内人

常相とら

大祿宮司長と兼む政和兄弟部大和椽
祿

延兼のぶ

有人 正六位上

季光きみつ

川田二代祿直在祿三十年
長徳の比後五位上

寛仁元年入部の姓と改度會乃
姓をたへし後一条院代始の貴

常親とら

横智長官在祿二十二年
執事十一年 平康曰子傳任

常季 とよゆき

川田一休 せいでん 祿宣 ろくせん

常任 とよね

種を除くしがため永代祿宣の額を
とよねめ久志不と号す

種を除くし しゅをのぞく

祿宣 ろくせん

永代 えいだい 祿宣 ろくせん の額 のくわだ

常行 とよゆき

送五位 よこゑ

二休祿宣 にきゅうろくせん

夷雅 ひら

権任五位 ごんねん

夷長 ひら

官府六位 くわんぷ

夷通 ひら

権任五位 ごんねん

夷重 ひら

権任五位 ごんねん

常春 子

叙爵官府 よし

常朝 子

檢祿直 この

宗愛 子

法不 り

智剛 子

法不

常直 子

從五位下 よ

常保 子

從五位下

常宗 子

從五位下 よ

常好 子

從五位下

常卿 子

從五位下

常負 子

從五位下

常光 子

從五位 國防守 こ

歩美 あゆみ

従五位下 よごゐげ

常顯 とこ

従五位下 よごゐげ 大京亮 おほのきやうりやう

冬列 ふゆり 小いなり

人権現 ひとけんげん 一法か いつぽうか 一 ひと

天正十八年 てんしやうじやう 小田原 おくだわら 陣 じん 小供 こくわい 有 あり

曰年十月 いっねんじゅうがつ 小卒 こそつ 一 ひと

常範 とこ

従五位下 よごゐげ

大京亮 おほのきやうりやう

参 まゐ 長三年 ながしやうしん 乃 なほ 参 まゐ 武列 ぶりやく 福 ふく 有 あり

台徳院 たいとくゐん 敬 けい 冲 しゆ 不例 ふれい 乃 なほ 参 まゐ 河 か 病 やまひ 証 しやう 分 ぶん 物 もの

な な 時 とき 一 ひと 常範 とこ 河 か 脈 みやく を を 診 しん 一 ひと

御 ご 痲 ま 瘰 れい の の 旨 しよ と と 参 まゐ 一 ひと 河 か 業 ごう を を 献 けん

一 ひと 瘰 れい 瘰 れい 快 かい 敷 しき 一 ひと 河 か 平 へい 渡 わたり の の 一 ひと

御慶長十九年
御食禄を大御
御

同又年

徳院殿野列中郡交り木号路

御所と海に供奉

徳院殿之人乃御姫君大坂加賀

御所へ御嫁礼に時々の御奉

はと心

常亮

従五位下 内苑元

慶長十九年大坂御陣より供奉

元和元年大坂再乱より御供奉

同七年采地を奉る

常元

内苑元

元和九年

白徳院殿より

將軍家小調きりより

寛永二年父乃進跡しんを給たまふ

常衛じょうゑ

從五位下

大京亮

常勝じょうしょう

從五位下

大京亮

實じつ々常諒じょうりやうが子なり

寛永十二年四月

將軍家しんぐんけよりしんぐん調きりより

常諒じょうりやう

從五位下 右馬助

元和八年四月より

白徳院殿より

將軍家しんぐんけよりしんぐん調きりより

寛永十六年食禄しやくろくを給たまふ

常廣つら

右次郎

從五位下

常兼かね

三郎

常辰つとむ

從五位下

丹波守

常弘つらひろ

從五位下

常孝つらたか

從五位下

武部少輔たけべのすけ

實まこと八やち常つら顯あきらが子こなり

常依つらよ

与十郎

從五位下

實々常孝が子なり

寛永十三年

將軍家小幡こはた常つね一ひとつ

常真つねまこと

從五位下

因防守

常平つねひら

從五位下

武部たけべ少輔すけ

實々常孝が子なり

元和元年二條亭小おわく

大指現おほさし一ひとつ

同年伏見乃城ふしみのしろ一ひとつ

白徳院殿小謁しろとくゐんどのせうてつ一ひとつ

曰六年

將軍家小謁見しやうげんかみせうてつけん一ひとつ

寛永十五年十月せいのごねんじゅうがつ別度會郡べつどくわいぐん

一ひとつ

常良 とよし

孫四郎

從五位下 よじわげ

寛永十三年

將軍家小孫 とよし 謂 い 之 を 云 ま へ

常尚 とよし

三郎

從五位下

景胤 かげのむね

彈正忠 たけのちか

右河乃義氏一法也

平姓

淡江 あふゑ

稱号 なづか
累代武列岩付淡江一頃也 いまたいぶつらつあふゑ
一頃也 いんげん

好亂

孫十郎 紀伊守

義氏

長喜

徹母

幼少より之喜を師として醫術を
學ぶ後流族として江戸に居り

寛永十一年小町に召されて

將軍家に法かへるもつ

同十四年 子代姫君御不例乃とき

殿中 小伺候し 御平漢乃後白銀を

そふふ

同十六年

將軍家御不例乃と記御薬を献て

まじりて時より御命をまじりて

法橋小叙し び小黄命をなす

同十七年

將軍家日光御社系乃也吉供奉

